

心地よい停滞の中の不安

田所昌幸

(慶應義塾大学法学部教授)

Masayuki Tadokoro

1956年生まれ。京都大学大学院法学研究科中退。姫路獨協大学法学部教授、防衛大学校教授などを経て現職。専門は国際政治学。著書に『「アメリカ」を超えたドル』（中央公論新社、サントリー学芸賞）、『ロイヤル・ネイヴィーとパクス・ブリタニカ』（編著、有斐閣）など。

はじめに

一九七七年夏、まだ大学三年生だった私は、当時の学生にとっては思い切った大金をはたいた初めての海外旅行で、イギリスを皮切りに西ヨーロッパ諸国に出かけた。当時はサッチャーの新自由主義的改革を開始する前のイギリスだったはずである。イギリス人が、この国は悪く

なる一方だと異口同音に語っていたのを憶えている。確かデンマークのユースホステルで、「なぜわざわざ西ヨーロッパなんかに来るんだ。もう斜陽国家ばかりで重要な場所ではないのに」といったことを同世代のドイツ人に言われて、答えに窮したこともあった。確かに、六〇年代に海外を訪れた世代が持った、何もかも圧倒的に優れた欧米先進国に圧倒されるといった思いはなかったが、西ヨーロッパの何にそんなに悲観しないといけない

のかが私には飲み込めなかった。一番長く滞在したイギリスは、サッチャー首相による一連の改革前の高福祉国家で、鉄道やバスなどの公共料金はもちろん、音楽会や芝居の値段もやけに安かったのを憶えている。治安も良くて、少しロンドンの郊外に出ると、つたない英語で道を聞いても皆につこりして助けてくれた。食べ物には感心しなかったが、広々とした公園は印象的だった。何より大学三年生でそろそろ自力で食べていくことを考えねばならない時期にさしかかっていた私には、毎日ネクタイをして朝から晩まで職場に拘束される日本のサラリーマンよりも、失業しても楽しくやっているイギリス人の生活の方が、圧倒的に豊かに思えた。これが衰退というのなら、いったいその何がいけないのだろうか――。

ことによると今日日本にやってくる外国人は、当時の私ほどではなくとも似たような感じを持つかもしれないと最近思い始めた。日本の現状と将来については、悲観一色といつてよい雰囲気が続いている。「日本なんかよりも中国に行けば」という言葉が、日本人自身の口からも出ているだろう。だが、その割に日本はいったって平穏で、人々に危機感があるようには見えない。「崩壊」

「敗北」「滅亡」といった毒々しい言葉が並ぶ週刊誌のつり広告の下で、電車で揺られながら黙々と秩序正しく通勤する人々の姿は、そういった日本を象徴している。日本経済の停滞ぶりは来日する外国人の目にも了解できるかもしれないが、日本の治安は依然として非常に良いし、時間通りにやってくる電車、どこにでもあるコンビニ、清潔な町並みといったことから、この社会が見事に細かく組織されているという印象を持つ人がいても、国際比較の観点からは見当違いと言えまい。私自身、海外出張から東京に戻るたび、電車で全く無防備に居眠りできる幸せを感じるが、これは愛国心によるものでもなからう。実際いよいよ日本が絶望的なら、ここから脱出して自分の人生を別の場所に賭ける若者が増えてもよさそうなのである。だが現実には日本からの移民は非常に少ないし、海外に留学する若者ですら減っている有様である。にもかかわらず、日本の知的雰囲気は宿命論的な悲観論一色の様相を呈している。今の問題を語ることは、実は「過去」や「未来」を語ることに分がちがたく結びついているのが、我々の一般的な時間感覚である。「復活」や「再生」というスローガンがしきりに語られていること